

# 発達障害幼児の療育合宿\*

— 日常の療育活動との関連の中で —

後藤 秀 蘭<sup>1)</sup> 村上 英 治 遠藤 由 里<sup>2)</sup>  
加納 敏 子<sup>3)</sup> 江口 昇 勇<sup>2)</sup>

## はじめに

子どもは、先の報告(村上ら, 1976)において, “かわりスケール”を用いて子どもたちひとりびとりの発達の段階をとらえ, そのひとりびとりの発達に応じた療育を行なっていくべきこと, さらに, 子どもたちの集団化をすすめるためには, 療育者と子どもの二者関係を確立することが基盤となることの二点を指摘してきた。これらをとおして, 発達障害幼児の早期集団療育の意義をさぐり, 実践的な方策を求めようとしてきたものである。

何人かの子どもたちに, 複数の療育者が, ある程度流動的に取り組んでいくという態勢をとっていることについては, すでに, いくつかの意義を述べてきている。子どもにとっては, 対人関係の深まりと拡がりの両側面からの援助を行なっていくことが可能となるし, 療育者にとっては, 相互研修の場としての意味づけが大きい。また個別治療では考えられないような療育プログラムをたてることも見逃せないことのようなのである。

しかしながら, こうした形態では, ともしれば子どもとの1対1の関係が曖昧にされ, 全体のスケジュールの中で流されてしまうという事態にも陥りがちである点, 留意されなければならない。療育者間相互の連携が充分になされてこそ止揚し得る問題であるだろう。

私どものこうした実践を, 有意義で息の長いものにしていくためには, その限界を十分に認識しデメリットを克服していくとともに, そのメリットを有効に生かしていくような方策がここでまた改めて考えられていかねばならない。

\* 本研究の概要は, 第25回東海心理学会に報告した。  
なお本研究実施にあたっては, 昭和51年度文部省科学研究費の補助を受けた。

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)

2) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(前期課程)

3) 名古屋大学教育学部臨床心理相談室

今年度もまた, 昨年度までの方法論を踏襲して, 週1回3時間の集団療育を行なってきた。ただ今年度は, 子どもの方もかかわる療育者の方も数が減少したので, 子ども4人に, かかわる療育者3人という1グループ編成で実際には運営された。基本的な視点は, 従来と何もかわるものではないが, 自閉傾向のある子どもたちが多かったためもあり, 比較的1対1の關係に重点を置いた療育に結果としてはなってきたようである。

こうした状況の中で, 従来も行なってきたことではあるが, 今年度, 私どもが特にその意味を考え, 重要な課題としてきたところの療育合宿の問題について, 今回は報告し, 検討を加えておきたいと考える。

## I 問題と目的

従来から, 私どもの療育実践においては, 日常の療育の外での活動についても, 積極的な意義を見出し, いわば恒例の年中行事として定着しつつある活動もいくつか数えることができる。春の遠足, 夏の海水浴, クリスマス会, お別れ会などのほかに, 各戸の家庭訪問を行なうなどして子どもに対する理解を深めるべく, また子どもたちに新しい体験をする援助をすすめるべく考えてきている。

一面で, これらの活動は, 私どもの療育を終えて, いわば卒業していった子どもたちに対するフォローの意味をも含めて考えられている。当所での療育を終結している子どもたちをも含めての同窓会的集まりを, こうした形で持つことにより, 子どもその後の状況を知ることができ, また親たちも, 相互のつながりを確認しあうことができる。こうした活動の積み重ねによって, 私どもの療育を, 息の長いものとして次につないでいくことができるものとする。こうした活動はたしかに私どもになっていくべき重要な課題の一つであるように思われる。

しかしながら, そうした日常療育外の活動はやはり,

きわめて当然のことながら、今、現に療育を行なっている子どもたちの発達援助としての位置づけにその焦点があてられねばならない。

そうした意味あいもふくめて、今回ここでの報告は、今年度の療育実践の中で、私どもの今年度の療育対象児を主たる対象として行なってきた夏・秋2回の療育合宿に焦点を絞り、その意味性と効果性を明確にしようとするものである。こうした検討をとおして、療育合宿の意義をあらためて確認し、そのねらいとすべき点を明らかにし、こうした活動のより望ましい方向を模索していきたいと考えている。

この療育合宿において子どもにとっては、それがどのような体験となったのか、そのことによってどのような変化が生まれてきたか、また、そこでどういった問題点が明らかにされてきたか。一方、療育者にとっては、子どもに対するどのような理解が開けてきたか、子どもとの関係を深めるきっかけをどう捉えることができたか。こういった視点からの検討をとおして、発達障害幼児を対象とする療育がいかにあるべきかという基本的課題にわずかなりとも接近することができればと願うのである。

## II 方法

検討するための素材は、夏・秋2回の合宿の直後に、それぞれの療育者によって記録された資料を中心としている。記録は、参加した療育者全員が、すべての子どもについて記述したものである。記録の様式は、(i)時間経過を追ってのものと、(ii)重要な事項についてのまとめとを併行している。(i)については、子どもの行動と、それに対する療育者の理解・うけとめを、共に記述するようにし、(ii)については、療育者との関係、子ども同志の関係、母子関係、その他の行動特徴などの項目をとらえるようにしてきた。

療育合宿の位置づけをさらに明確にするため日常の療育の記録もあわせてここではとりあげた。日常の療育から遊離して、合宿を位置づけることはでき得ない。むしろ、合宿の効果が、日常の療育にどのように反映されてきたかが、ここでの検討の重要な部分を占めるものとなる。

これらの記録をもとに、先の報告で引用した“かかわりスケール”を用いて、ひとりびとりの子ども及び療育者の変化を跡づける試みがここでの主要な方法とされた。スケールA(子どもについてのスケール)\*の評定は、療育者3人で合議した上、主たる担当が評定値を最終的に決定した。スケールB(療育者についてのスケール)\*\*は、全員による一応の討議にもとづいて、療育者各自が、それぞれに自分自身についての評定を行なった。

1年間の子どもの発達の様相をとらえ、その中で療育合宿が、どういう意味と効果をもっていたのかを検討するための素材として、これらの資料が有効なものとなるであろうと考えたのである。

## III 療育合宿の実際

### 1. ねらいとスケジュール

#### a) 夏の合宿

夏の合宿は、昭和51年7月30日から31日にかけて、岐阜県のもみじ谷キャンプ場において行なった。参加した者はその年の療育対象であった子ども4名に、前年度の対象児3名および、彼らのきょうだい6名が加わり、子どもたちが計13名、その母親7名、療育者側が10名、総勢で30名であった。

表1 もみじ谷合宿の療育スケジュール

<p>(第1日目)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• A.M. 11:00に、路線バスにて現地集合。</li> <li>• 昼食後、設定療育I 虫かごと補虫網を持って、近くの神社の境内まで散策。</li> <li>• P.M. 3:00から、自由遊び。 小学生のきょうだいを中心に、ドッジボールを行なう。</li> <li>• 夕食後、P.M. 7:00から、キャンプファイヤー、花火大会、歌合戦など。</li> <li>• P.M. 9:00、就眠。 子どもたちの就眠後、母親をまじえてその日の反省、翌日の予定についての確認、その他。</li> </ul> <p>(第2日目)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• A.M. 6:30起床、ラジオ体操の後、朝食、自由遊び。</li> <li>• A.M. 9:30から設定療育II 指定課題を遂行しながらの散歩。この時間を利用して母親グループのミーティング。</li> <li>• 昼食をとって解散。</li> </ul>
---

\* スケールA：子どもの外界に対するかかわりのあり方  
 { スtrand a：“ひと”とのかかわりのあり方  
 { スtrand b：“もの”とのかかわりのあり方  
 { スtrand c：集団でのあり方

\*\* スケールB：かかわり手のかかわりのあり方  
 その詳細については、村上らの先の報告(1976)を参照されたい。

従ってこのもみじ谷合宿には、健常児との混合療育的な側面も考えてのスケジュールがたてられた。概要は表1に示されるとおりである。

この合宿でねらいとしたのは次の諸点である。

- (1)自然と接する中で、子どもたちと寝起きを共にするインテンシブなかかわりにより、子どもたちの新しい感情体験にふれ、その理解に新しい視点を広げること。
- (2)新しい状況の中で、日常の療育では得ることのできない、より生き生きとした体験を、子どもたちが得られるように援助すること。
- (3)療育者間のチームワークを育てること。
- (4)前年度の対象児たちがその後どのような発達をすすめているかをたしかめること。

これらの点を、共通のねらいとして確認した上で、子どもたちひとりびひとりについての療育目標がたてられた。

#### b) 秋の合宿

秋の合宿は、昭和51年11月23日から24日にかけて行なわれた。第1日目は、児童遊園施設である愛知子どもの国にて過ごし、蒲郡で一泊、2日目には竹島を散索した後、三河湾スカイラインを経由して帰名した。この回の参加者は、その時点での療育対象児童4名と、その母親4名、療育者側は5名であった。2台の車に分乗して、比較的流動的なスケジュールで行なった。表2にスケジ

表2 蒲郡合宿の療育スケジュール

(第1日目)

- A. M. 10:00 に、大学に集合。  
車に分乗して出発。できるだけ母子を分離するように配慮する。
- A. M. 11:30 愛知子どもの国到着。  
昼食を済ませ、遊具広場、自由広場、動物広場にて遊ぶ。途中、園内バス、子ども汽車に乗る。
- P. M. 3:30 に愛知子どもの国を出て、三ヶ根山展望台で遊んだ後、宿所へ。
- 宿所では、入浴指導、食事指導のほかは自由行動。
- P. M. 9:00 就眠。
- 子どもたちが就眠後、母親をまじえてその日の反省。

(第2日目)

- A. M. 7:00 起床。
- 朝食後、宿所を出発して竹島へ。
- 竹島一周の散索。
- 車に分乗、三河湾スカイラインをドライブして帰る。
- P. M. 12:30 大学にて解散。

ュールの概要が示される。

この合宿でねらいとしたことは、次の点である。

- (1)基本的には、先回の夏合宿でのねらいを、さらに展開させること。
- (2)一方先回十分の成果が得られなかったと反省された、療育者との関係を、より深めるべく、特に今回はその時点で療育継続中の対象に限ったこと。

#### 2. 対象児童の概要

今年度の療育を開始した4月当時は、前年度から引き続いての子ども3名(タツオ、トシコ、マサト)に、3名の療育者がかかわるといふ態勢であった。6月に入り、タケシが新しくグループに加わり、子どもの数は4名となった。夏の合宿には、この4名の子どもが参加している。その後、9月に入り、タツオは、市立の障害児通園施設に正式に入園したため、終結としたが、それと入れかわりに、先年度の対象児であったミホが、10月からふたたび加わることとなった。秋の合宿の時には、従ってこの4名(トシコ、マサト、タケシ、ミホ)が療育の対象であった。

表3に、タツオをふくめて、以上5名についての概要を示しておく。以下、夏・秋2回の合宿をとおしての結果の概要は、この5名の対象児について述べられる。

### IV 結果のまとめ

#### 1. 療育合宿中の子どもたちの動きと、それに対する療育者のとらえ

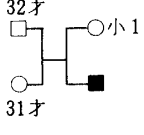
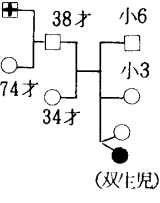
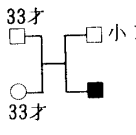
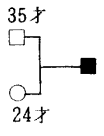
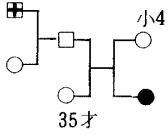
##### a) タツオの場合

タツオは、夏の合宿のみに参加している。

合宿中のもみじ谷では、新しい状況を感じとって、楽しそうにニコニコしている一方で、母親の姿が見える限りでは、母親にくっついて甘えている。集団療育中も、歩くのをいやがり、常に他児より遅れての行動しかとれない。母親の姿が、そのような時にふと見えたりすると、よけいにベソをかいて甘える。そうしたタツオを、療育者は、何度もはげまし、最後まで、自分で歩くよう援助する。自由遊びの時間には、いつもよりはしゃいだ様子が見られる。自分から活発に動きまわり、どの療育者に対しても、働きかけ、甘えようとしてよっていく。ドッジボールにも、一人前に参加してくる。集団に入り込もうとする気持ちには、かなり意欲的なものがみられる。常に、大勢のいるまわりでウロウロしながら、様子をじっとうかがっている。名を呼ばれるとそちらの方へ歩いていくが、健常児の動きが激しいのでタツオはついていけない。療育者が抱いて参加させてやると、うれしそうにしている。1日目の夜は、昼間の興奮からなかなか

発達障害幼児の療育合宿

表3 対象児の概要

対象児名 (生年月日)	家族構成	子供の状況	備考
<p>タ ツ オ (S47. 1. 13)</p>		<p>(主担当, 加納) ダウン症 (中度の精神発達遅滞)。体も小さく, ひ弱な印象をうけるが, 対人関係は, もち易く, きわめて反応性は高い。他児に対する働きかけも見られた。グループの中では優等生的存在。</p>	<p>S50年度の途中からグループに参加。 S51年度には市立の通園施設へ入ったため9月までで終る。</p>
<p>ト シ コ (S47. 9. 27)</p>		<p>(主担当, 遠藤) 過活動で統制が悪く, 対人関係は, きわめてもちにくい状況であった。2才代に言語及び対人関係発達の退行が報告されている一方で, 生下時は, 低体重で保育器を使用しており全体に発達は遅れ気味であった。 器質障害は無視できないが, 基本的には対人関係発達の問題と理解される。</p>	<p>S50年度, 10月よりグループに参加。 S51年度も継続。</p>
<p>マ サ ト (S48. 6. 22)</p>		<p>(主担当, 後藤) 寡動で反応性に乏しく, 基本的には自閉性障害が考えられる。1才前に目の上をケガしており, 一週間の発熱。手術の上, 20日間の入院をしている。それ以後, 対人関係発達を中心としての退行が認められ, 器質的障害も疑われる。</p>	<p>S50年度の途中よりグループに参加。 S51年度も継続。</p>
<p>タ ケ シ (S48. 4. 24)</p>		<p>(主担当, 後藤) 当初, ワゴム, 車のタイヤ, ゴムマット等に対する限定された興味から, 広がっておらず, こちらからの接触を避ける動きが強く認められた。総体的には, 全体発達遅滞と理解される。(D. Q. 45) 生下時, 仮死がある。</p>	<p>S51年度の6月より, 途中からではあるが, グループに参加してきた。(3:1)</p>
<p>ミ ホ (S46. 12. 15)</p>		<p>(主担当, 加納) 基本的な生活習慣は確立されているが, 当初, 頻尿が見られた。誰彼なく身体接触を求めてくるが, それ以上の関係はもち難く基本的に自閉性障害を示している。常同行動, 空笑, 奇声も認められる。生育歴においては2才代に言語及び対人関係発達での退行あり。</p>	<p>S50年度の療育対象児。普通幼稚園を半年で断られたため, S51年度10月よりグループに復帰した。</p>

寝つかれないでいた。2日目になると、1日目より、いっそう楽しそうに、ラジオ体操などにも積極的に参加しようとする。療育者のところへ自ら寄ってきては、ひとりずつに要求し遊んでもらおうとする。集団療育の場面では、泣きながらも、最後まで頑張って歩くことができた。

こうした動きを日常の療育との比較において考えてみると、身体接触要求の多さ、感情の不安定さが何よりも注目される。特に母親と一緒にいる時は、ベッタリと依存的になってしまうため、できるだけ分離しての療育をねらうこととした。タツオにとっては、いつもとまるで違う雰囲気の中で、つい楽しくなって周囲に積極的に働きかけようとする一方、不安も高く、どの療育者に対しても、甘える動きが多くなったものと考えられた。日常の療育ではみられなかった、甘えん坊で、ひ弱なタツオの姿を明確に理解することができたように思われる。また、他児の集団遊びに寄っていくタツオの姿は、予測以上に、タツオの中で、ほかの子どもに対する意識が高いことを、療育者に気づかせるものがあった。

こうした状況において、タツオは、多くのおとなたちに遊んでもらったり、泣きながらもはげまされて目的地まで歩かされたり体験が得られたものと理解してよいであろう。この2点において、タツオにとってはきわめて貴重な体験となり得たものと考えられる。

#### b) トシコの場合

夏の合宿の時は、ちょうど、トシコに母子分離についての不安がみられはじめた時期であった。最初のうちは、療育者が働きかけても反応せず、母親にくっついてばかりいる。母親を後追いすることは激しいが、いったん分離してしまえば、療育者には構わずに、走りまわり、水を見つけるとビショぬれになって喜々として騒ぐ。2日目になり、若干、分離の時の抵抗は少なくなったが、2日間をとおして、母親とくっついているか、ひとりで走りまわっているかのどちらかであった。療育者は、そうしたトシコの動きにふりまわされ、あとをついてまわることで精一杯であった。

日常の療育においては、こうした母子関係を観察することはなかなかできないが、この分離不安の顕著なことを除いて考えれば、トシコの動きは、室内遊びの多い日常の療育よりは、全般に生き生きしてみえた。走りまわることと、水遊びに執念を燃やしているみたいにする思われ、療育者との関係は、むしろ散漫に終わっていたといえる。療育者は、トシコを追いかけること、それ以上に関係を深め得なかったという実感を持たざるを得なかった。他児に対する意識も特にみられなかったし、食事場面でもいつものように、あまり落ち着いては振っていない

ように思われた。

秋の合宿の時には、母子の分離に抵抗はなかった。先回よりも、周囲に対する意識は高くなっており、さまざまな遊具に積極的に取り組もうとしているが、まだうまくゆかないでいる。しかし、トシコの興味をひくものがあれば、走って行ってそれを見ようとする。2日間とも、療育者は、ほとんどつきっきりで、トシコにくっついていなくてはならない状況であった。乗物に乗っている時は、おとなしくしているが、宿所についても、コソコソとあちこちを歩きまわる。食事のときも、なかなかじっとはしていない。夜は、疲れのためか、普段よりも、ずっと早く寝たようであった。

この時も、トシコは、日常の療育の時よりも活発に動きまわっている。いろいろな新しいものに触れ、取り組もうとしたことは、トシコにとって意味のある体験だったのかも知れない。一方で、療育者との関係では、たがいに時間をかけて対決しあう状況が作り得なかったことは否定できない。ただ、2日間集中的に、主たる療育者とばかりいっしょに行動し得たことは、トシコの意識の中でその後の療育者との関係を深める契機となり得たものと考えられる。

#### c) マサトの場合

夏の合宿においてのマサトは、いつもより多少、表情に柔らかさが感じられはしたが、特に変わった行動を認めることはできなかった。自由遊びの時には、ひとり勝手に、作りつけの舞台の上で、機械類に手をふれたり、飾りのツボをのぞいたりして、ウロウロと歩きまわっている。療育者は、この機会に、マサトにゆさぶりかけたかと思いき、集団療育の時などには、かなり強引に、歩かせるようにした。その途中で、何度か、ダダをこねることもあったが、次第に自分のペースで、それなりにくっついて来るようになった。そうした行動をみていると、マサトの中では、この変わった状況にきたからといって特に、何事も感じていないようにも見受けられたが、1日目の夜には、午前3時頃まで、寝つかれなかったようであった。これからしてみれば、マサトは、マサトなりに神経を昂ぶらせていたのかも知れない。

マサトの気持の動きは、日常の療育の中でも、未分化でとらえにくい。特に、こうした状況の中では、療育者の方にほかのさまざまな雑事がある、安定したかわりを持ち得ない。

それだけに、マサトのわずかに示してくる感情の動きが十分にとらえ切れなかったようにも思う。しかし、夜、寝つかれなかったというマサトの姿は、マサトなりに、この状況を受け止め、感ずるものがあったことを示しているものと思われる。療育者側が、活動性の少ない、運

動不足気味のマサトを、強引に引っ張ってかなりの距離を歩かせたことを、彼自身どんな風感じたことであらうか。

秋の合宿の時にも、マサトは、さかんに歩いていた。母親の後を追ったり、療育者を追ったりして、ある時は、笑いながら、ある時は泣きながら、走ったり歩いたりした。今回は夏の合宿よりも、気持ちが不安定になっていたようで、泣いたり、笑ったり、ダダをこねたり、はしゃいだり、感情の変動がかなり激しかった。子どもの国でも、遊ぶのをいやがって、泣いたりしていた。療育者が抱いてやると、おとなしくしている。常に誰かに抱かれたがって、後を追って走っていることが多かったようにみうけられた。

マサトにとっては、とにかく、良きにつけ悪きにつけ、かなり強烈な感情体験が生じてきた状況であったと思われる。それに影響されてか、よく走ったり歩いたりした2日間であった。帰りの車中では、もうぐったりしてねむりこむだけのマサトであった。

#### d) タケシの場合

夏の合宿中タケシは、いつもより、はしゃぎまわって、ウキウキした表情であった。マサトと同じ舞台の上で、あっちこちのぞきこんでは楽しんでいる。療育者が近づいていくと、“オーッオーッ”と話しかけてくる。どこにいても、すぐに遊び道具を見つけては楽しむタケシである。療育者がそばにいてやれば、何かしら話しかけるようなふりをしてくる。集団の遊びには入ろうとしないが、同年齢位の幼児が近づくと、かみついたり、たたいたりして、キカン気の顔を見せる。タケシもまた、夜の寝つきが悪かった。途中一度、興奮のためか、廊下を歩いていてオモラシがみられたほどであった。

タケシにとっての、この療育合宿は、まさに新しい体験が多く生じた時であったように思われる。自分から積極的にほかの人にかかわっていくほどではないが、療育者がそばにいてやれば、その時の感動を、目をまん丸にして伝えようとするかのようにみられる。いつもより一段と、活発に動き回っていたタケシであった。

秋の合宿は、ちょうど母子分離不安が強くなってきた時期にあたっていた。そのためもあってか、母親にくっついて歩いていることが多かった。しかし、動物広場で、ウサギを見つけた時には、実に喜々としてかけより、療育者の方を見上げて、エヘへと笑いかけてきたりした。また、いつものように、タイヤ、植木鉢、ゴム、穴などを見つけると、さっそくそっちへ走って行って遊んでいる。主として母親と手をつないで、足取りも軽く、あっちへこっちへと走りまわっている感じ。宿所での食事も、楽しげに、ケタケタと笑い、何事かペチャクチャとしゃ

べり、最後まで自分の席でおとなしく座っていることができた。帰りの車中では、少し元氣なく、しばらくはゴムマットで遊んでいたが、すぐに療育者に抱かれて眠りこんでしまった。

こうした状況で、療育者がタケシとかかわりを持てた時間は、それほど長くはないが、そのわずかな間でも、すごく楽しげなタケシに接することができた。また、こういう新しい事態の中で、ずっと母親といっしょに過ごしたことは、母子関係を深めていく上で何らかの意味が見出せるように思われた。

#### e) ミホの場合

ミホの参加したのは、秋の合宿のみである。行きの車中から、30分おきに排尿を訴え、かなり頻尿傾向であった。子どもの国では、たいそう喜んで、遊具で遊んでいる。ひとりで先に立って、目ざす遊具までまっしぐらに走っていき、周囲にかまわず遊んでいるという感じ。宿所では、ニコニコと表情もよく、おとなしかった。母親に言われて、ハトポッポ体操などをやってみせてくれたり、突如トシコに抱きついたりしている。ややはしゃぎすぎるくらいの感じであった。

ミホは、日常の療育では、それをみせてくれることはないが、この合宿では、母親の指示によって、いろいろなことが出来ることを療育者たちに示してくれた。どういう風の吹きまわしか、トシコに抱きついてみたり、お風呂に入った時、“ヌルイ”と言語を発したり、またちょっと疲れてくると母親に抱かれにいけないと気が済まなかったり、日頃みられないような行動を示していた。笑顔の多かったことが印象に残っている。大学で解散してからも、まだ遊びたらないようだった。しかし、帰宅した晩に、かなり長時間にわたるひきつけ、39度の発熱をおこしたと後で聞いたのは、それが何にもとづくものなのか、気にかかるところである。

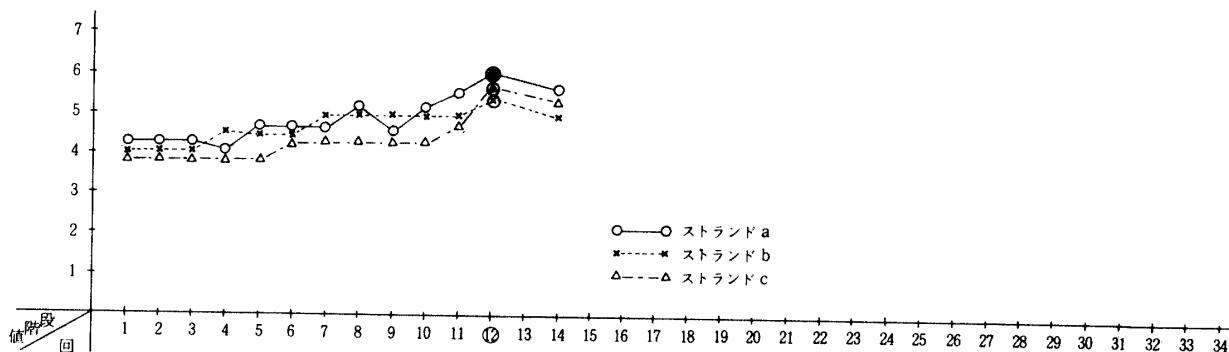
## 2. 子どもたちの発達の様相と療育者の理解の深まり (療育合宿の位置づけについて)

### a) タツオの場合

タツオが療育を中断して母子通園施設に正式に入るまでの半年間の様相を、“かかわりスケール”によって跡づけようとしたものが図1-1に示されるスケールAの評定値の動きである。12回目に○印を付したのが、夏の合宿の際のものである。

スケールAは、a, b, c, どのストランドも、段階値3が、ちょうど外界に対する意識の広がってきた段階にあたり、段階値5となると、外界に対し積極的にかかわっていく段階を示すことになる。

タツオにとっては、療育者が3人とともに、その前の年と



〈図1-1〉スケールAの評定値の動き（タツオの場合）

かわって新しくなったのだが、そのことで特に抵抗することはなかった。自分から積極的にかかわろうとする意欲は、全般に認められなかったが、働きかけに対する反応性は高く、最初から集団遊びにも参加しようとしてきている。タツオから働きかけてきた時に、相手になってやるようにしていると、たいそう嬉しそうに遊びはするが、自ら主体的に遊びを選択するまでには至っていない。対人関係の持ち方自体が、まだ、依存的・受動的である。従って、タツオの行動エネルギーを、より意図的に引き出すべく、4回目からは、砂遊び、水遊びに、フィンガーペインティングをも加えての、身体感触の遊びを中心にした療育を行なっている。そうする中で、まず、“もの”に対する積極的なかわりが見られるようになり、感情表出にも力強さが感じられるようになってきている。そうしている中で、療育者に対しても自分から要求を出したりする動きも見られるようになってきている。他児との関係でも、最初、トシコにくっついて歩いているという状況から、療育者の援助により、手をつないだり、キスしたりという動きまで出てきている。こうして、3本のストランズが、段階値5によく達した時期に、夏の合宿に参加したのである。

合宿中の評定値は、どのストランドも上昇を示してい

る。タツオはいつもよりも外界に対する興味を示し、特に、健常児にくっついてまわって、いっしょに遊ぼうとしていたことが目についた。

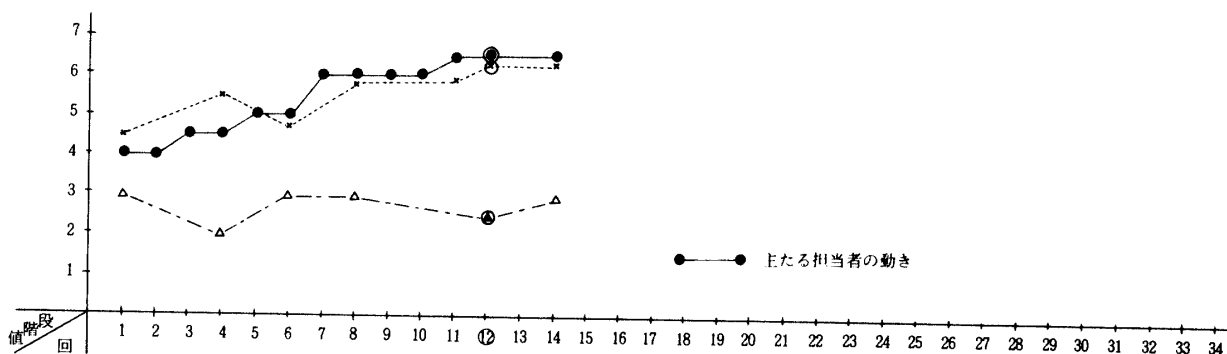
合宿後には、もう一度療育に参加しただけであるが、またもとの状態にもどっている。タツオにとって療育合宿の状況は、普段よりもその興味を刺激されるようなものであったといってもよいように思われる。

一方、療育者側のかかわり方の展開過程をスケールBの評定値によってとらえようとしたものが、図1-2に示される。

ひとりの療育者は、自分の担当児にほとんどかかりきっており、他の子供達にまで意識を向けることが出来ておらず、評定値は低いままにとどまっている。ほかのふたりの療育者にとっては、タツオは比較的受けいれ易い子どもであり、順調にタツオに対する理解も深まり、自由なかかわりが、できるようになっている。そうした高い段階で、療育合宿を体験しているため、タツオのひ弱な面が合宿場面で明確化されてきたとしても、特にかかわりのあり方に影響をうけるまでに至らなかったようである。

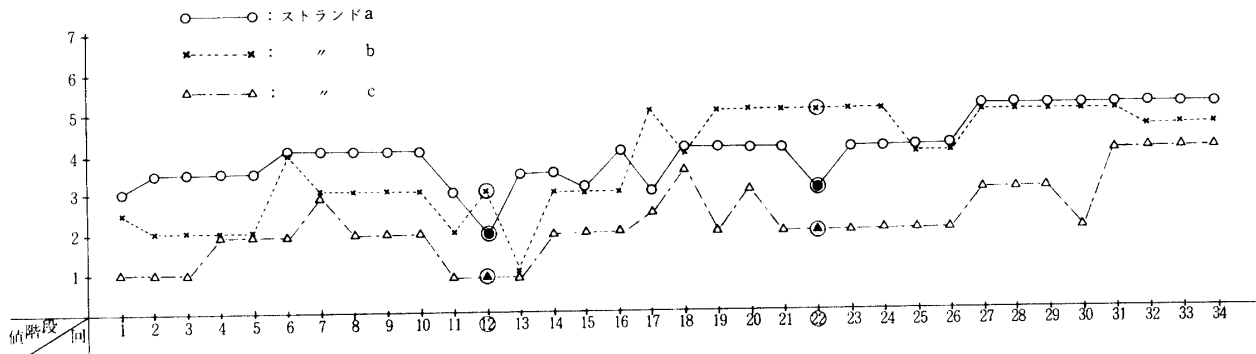
b) トシコの場合

図2-1に示したスケールAの評定値の動きは、トシ



〈図1-2〉スケールBの評定値の動き（タツオに対する各療育者の場合）

発達障害幼児の療育合宿



〈図2-1〉スケールAの評定値の動き（トシコの場合）

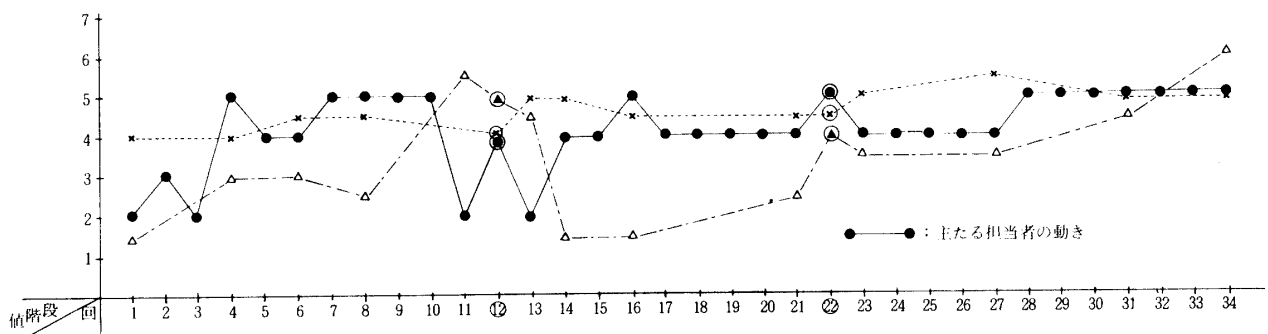
この1年間にわたる発達の様相をあらわしている。そのうち○印を付したのが夏・秋それぞれの合宿時点におけるそれである。以下の子どもの場合もこれに従う。

トシコの動きは、最初からずっと激しく、非連続である。外へさかんに出たがり、出てはむやみに走りまわる。室内で砂を一面にまきちらしたり、雨の中で喜々として水遊びをし、泥をこねまわしているかと思うと、主担当の療育者に抱かれてベッタリとくっついていたりする。走りまわっている間は、トシコの眼中には、何も入らない。遊びの内容も、ごく限られていて、それ以外の遊びをすることはない。まれに気がむくと、新しい遊びを積極的にやることも、他児と手をつないだりすることもあるが、その時の気分によって外界に対するかかわり方はかなり違うような印象をうける。11回目の時には調子が悪く、ひとりの療育者にずっと抱かれてぐずぐずいうだけに終始した。夏の療育合宿に入る時点でのトシコは、療育者に対し、一方的に依存しているか、またごく限られた遊びをしゃにむに行なっているかのどちらかであり、他児に対しては、ほとんど意識を向けていないようすが顕著であった。

夏の合宿中には、母子分離の問題もあったし、トシコの行動を統制する必要も生じてきて、療育者との関係は、

低くなっている。その後数回は、母子分離がふたたび困難になっていたが、それを乗り越え、急速に外界に対する意識が広がってきたようである。主たる担当者に対する甘えが強くなり、行動の統制が出来はじめて、いろいろな遊具に興味を示すようになる。他児と並行遊びをしている姿もよくみられるようになる。こうした変化のみられはじめた段階で、秋の合宿を迎えたのである。

合宿中は、トシコも走りまわることが多く、新しい遊びに積極的に取り組んでいって、療育者との関係はむしろ下がっている。この療育がすんでから、トシコは、時間は短く限られはしたが、毎日、近所の幼稚園へ遊びに行く機会を持つことが許されるような状況になった。その影響もあったのかも知れないが、23回目以降のトシコの動きは、不思議なほどおとなしくなってきた。まだ、走りまわっていることもかなり多いが、じっと周囲の状況を見ていたりする様子もみられ、食事もしっかりと座ってするようになった。周囲の状況をうかがうような様子をみせはじめた頃は、不安そうな感じで、よく療育者に抱かれていたが、次第に表情も柔くなり、発声も多くなってきたように思われる。主担当の療育者以外にも甘えてきたり、他児と一緒にトランポリンでとんでいたりすることが多くなってきたのもこの頃であり、療育者と



〈図2-2〉スケールBの評定値の動き（トシコに対する各療育者の場合）



の関係はかなり安定したものとなってきている。

トシコの場合、2度にわたる療育合宿の前後に、外界に対する意識において質的な転換期を持つことができたと考えられよう。それをただちに療育合宿の効果として受けとめることは、たしかに無理ではあるが、それに伴うさまざまな状況が、これらの契機となったものとも思われる。少なくとも、多動のトシコにとっては、自然にかこまれた広い場所に出て、思い切りそのエネルギーを発散することができたように考えられるのである。

トシコに対する療育者のかかわりのあり方は、図2-2に示されるように、まさに3人3様である。主担当者は、初期においては、トシコの動きにふりまわされ、その甘えを喜んで積極的に受けとめるかと思うと、母子分離不安を示し、不安定になるトシコを受けとめきれないで、自分の方がオドオドしたりする。しかし分離不安が消えてからは、比較的安定した関係がもててきている。秋の合宿の時には、日頃と違った深いかかわりの体験を得て、その後のトシコとの関係に自信を得たものと思われる。

また、ひとりの療育者は、最初トシコとの間に相性の悪さを感じてあまりかかわろうとせずにはいたが、トシコが、母子分離不安を示してきた時に、それを受けとめる役をになうこととなった。それを契機として、かかわりが持てるようになるが、主担当者とトシコとの関係が好転するのを確認して、その関係からまた意図的に遠ざかろうとした。それが、秋の合宿の時に、トシコの新しい一面に触れることによって、ふたたび彼女に対する理解が深まり、またトシコの意識の拡がりともあいまって、かかわりが展開していった。今ひとりの療育者に対してはトシコも抵抗なく抱かれていき、療育者の方も、それを一貫して受けとめており、そこから特に深まることもないが、安定した接触を保っているとみてもよい。この療育者の場合、トシコに対しある程度の距離を保つことにつとめており、特に療育合宿という状況からの影

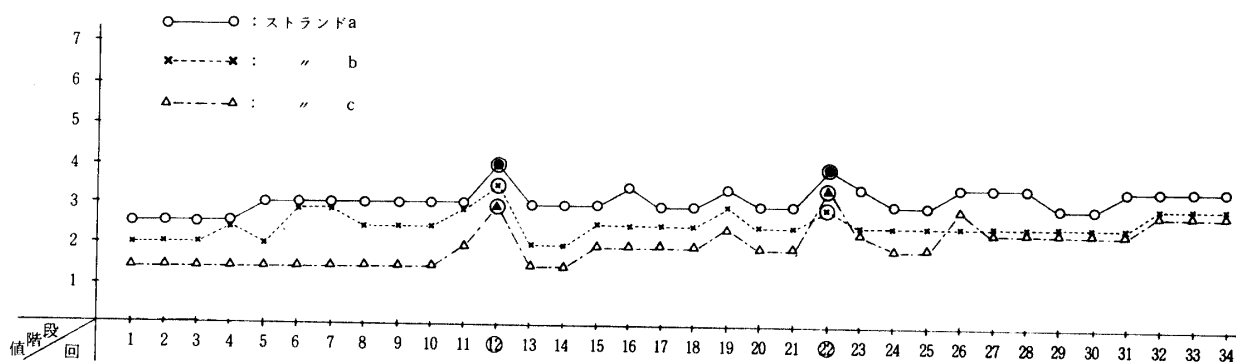
響を受けているとはみられない。

### c) マサトの場合

図3-1に示されるように、マサトは、活動性も低く外界に対する興味・関心もまた開けているとはいえない。主担当の療育者とは、今年度の療育がはじまる前、3ヶ月にわたって個別の関係を作ってきたためもあって、この療育に入っても、主担当者に対する身体接触要求は、さかんである。マサトの活動性をたかめ、外界に対する興味をより開発するため、身体的ふりまわしを中心とし、水遊びやフィンガーペインティングをも積極的に用いるようにしてきた。そうする中で、外界に対する意識がぼつぼつ出はじめるようになったが、その段階で夏の療育合宿に参加したのである。

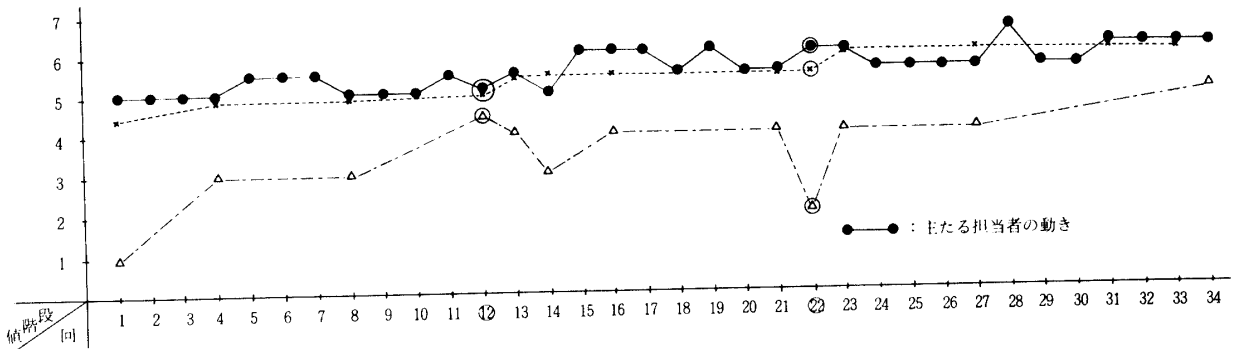
夏の合宿においては、そうした療育目標をさらに展開させるため、療育者との個別の関係を基盤に、積極的にひっぱりまわし、さまざまな機会を見つけて、マサトに対しゆさぶりかけようとしてきた。たしかにマサトはそれに反応するようになってきている。療育合宿後は、その成果であろうか、動きが少し活発になってきたように思われた。表情も柔らかくなり、排泄の失敗がめだって減少した。そこでさらに関係を展開させ、生活習慣の確立をはかるため、食事場面、遊び場面などで、療育者の要求・意志を、マサトに強力で伝えていくことを考えていった。この間マサトは療育者に叱られて泣いたり、甘えなどの感情体験を重ねてきた。

秋の合宿においては、そうしたねらいがさらに深められる状況となった。泣いたり、笑ったり、甘えたり、怒ったりなどの感情が、療育者との関係の中で、明確に分化して体験されてきたものと思われる。ここでの体験がまた、マサトにとっては、外界に対する意識を開くことになっていったのではないかと考えさせられる。他児との並行遊びが多くなり、他児に働きかけることもまれに見られるようになってきた。1年にわたる療育の後半は、かなり外界に対しても積極的にかかわるようになり、一方で、



〈図3-1〉スケールAの評定値の動き (マサトの場合)

発達障害幼児の療育合宿



＜図3-2＞スケールBの評定値の動き（マサトに対する各療育者の場合）

療育者に対する甘えは、ますます自然なものになってきたように思われる。

マサトの場合は、こうして2回の合宿とともに、その時の療育目標と合致した展開をはかることができたし、その後の展開にも望ましい影響を及ぼしたものと考えられる。

図3-2に示されるように、主たる担当者といまひとりの療育者とは、マサトとのつきあいも昨年度から続いており、マサトも比較的身体接触要求が多く、比較的安定した接触を一貫して保つことができている。もうひとりの療育者は、マサトの身体接触要求を受けとめることに、若干の抵抗を示していたが、夏の療育合宿において、マサトの感受性の鋭い一面に触れることにより、その抵抗を克服してきたようである。秋の合宿では、自分の担当児にかかり切りになることで、マサトにまで意識がまわらなかったため、この図では低い段階にとどまっている。

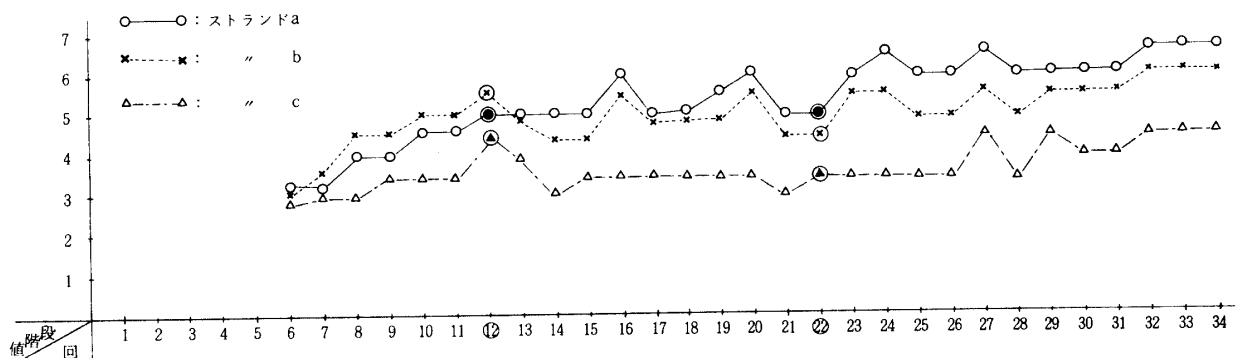
d) タケシの場合

タケシは6月から新しくグループに参加してきた。その発達の様相は図4-1に示されたとおりである。

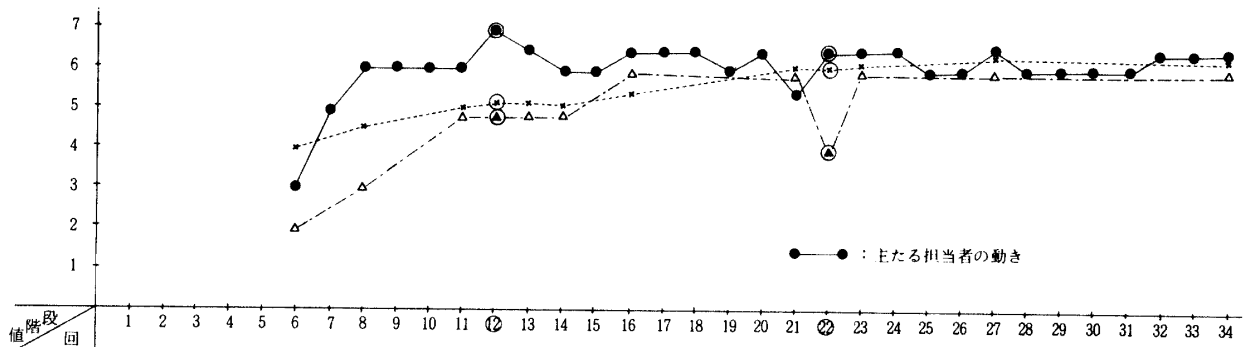
最初から一応外界を意識しており、働きかければ、反応もみられるのだが、ともかく自分の興味を追求するこ

とにかかりきりである。相談室の玄関のゴムマット、植木鉢に対する興味が強く、それらをひっくり返したり、たたいたりしていつまでも飽きずに遊んでいる。療育者がほかの遊びに誘っても無視するし、体に触れられたりすると怒って療育者を叩いたりする。しかし3回目くらいからは、かなり療育状況になれてきたのか、抱かれることに対する抵抗は減ってきており、同時に、自分から遊びを楽しむようになってきている。療育者の方を見て、承認を求めるような動きもみられるようになったが、全体としては、ふくれっ面をしていることが多く、笑顔はあまりみられない。他児からもひとり離れて遊んでいる。集団遊びに入ることには、かなり抵抗を示し、拒否する。

夏の合宿におけるタケシは、いつもより動きも活発で、表情もニコヤカだった。笑顔が多く、いろいろなものに興味を示し、いつもは無視している他児とケンカしたり、並行遊びをしていたりする姿がみられた。その時その時の雰囲気の影響され、彼なりに楽しんでいたように思われる。療育者との関係は、その頃をきっかけにかなりすすんできている。また合宿の直後から、母親の後を追うことが強くなり、療育の場でも、分離に抵抗を示すことが3回続いた。その間は、お気に入りのタイヤばかりで遊んでいたが、その時期を過ぎると、また次第に動きも



＜図4-1＞スケールAの評定値の動き（タケシの場合）



〈図4-2〉スケールBの評定値の動き（タケシに対する各療育者の場合）

のびのびしてきて、療育者と遊んでいても楽しそうにしており、興味もどんどんひろがってきたようにみうけられた。

秋の合宿の前から、また母子分離不安が強くなってきており、母親を求めて泣くことがみられている。秋の合宿の時は、ほとんど母親と一緒に行動していた。療育者も、あえて分離を強行することもしなかった。ところがその次の療育の回からは、分離に対してまったく抵抗を示さず、ニコニコしながら、いつもの遊戯室へと走って入っている。本当に楽しそうに、療育者に声をかけることも多くなり、自分の体験したことを、一生懸命、療育者に伝えようとするが多くなった。今まで、こわがって乗らなかったトランポリンにも、療育者に抱かれて乗るようになっていった。行動がのびのびして、いろいろなものに興味が広がってくると、さらには、他児に対する働きかけもみられるようになり、多くの時間を、他児と同じことをして遊んでいるようにまでなっている。

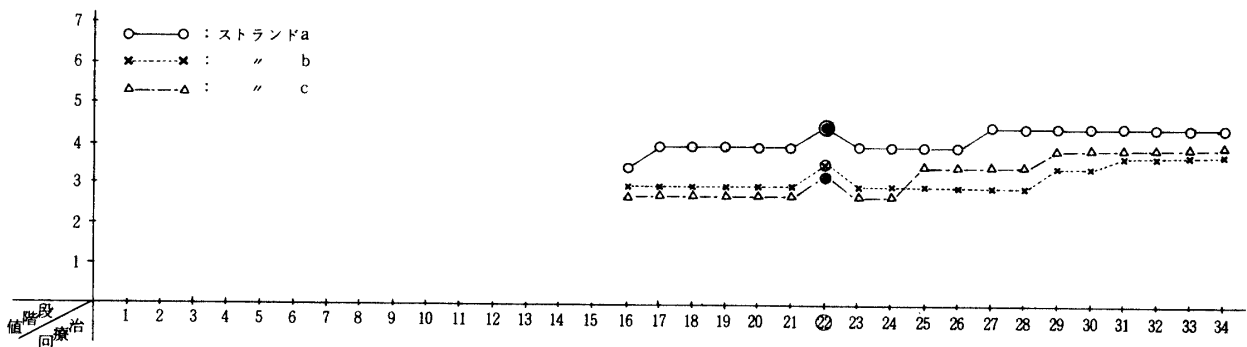
タケシにとって夏の合宿は、療育者との関係を深める上での意味が大きかったように思われる。また秋の合宿では、母子間の関係をタケシなりに確認し、分離不安を乗り越える上での意義が深かったようにも思う。外界に

対するかかわりの意欲が強い反面、一方で不安もかなり強く示すタケシにとっては、療育合宿といふかなりはげしい刺激事態を、療育者なり母親なりに支えられて乗り越えることが、その後の発達足の足がかりともなり得たのだとみてもよい。

また図4-2に示されるように、主担当の療育者にとっては、夏の合宿中のタケシとのふれあいの意義が大きい。いつもとは、だいぶ違うタケシの姿に対することによって、その後のタケシに対する理解が深められている。タケシの場合、療育者3人ともが、比較的望ましい関係を作りあげているがこれは、タケシの動き自体が、受けとめやすいものであったためもあって、主たる担当者のとらえが、かなり療育者間に共通のものとなり得たためであろうと考えられる。

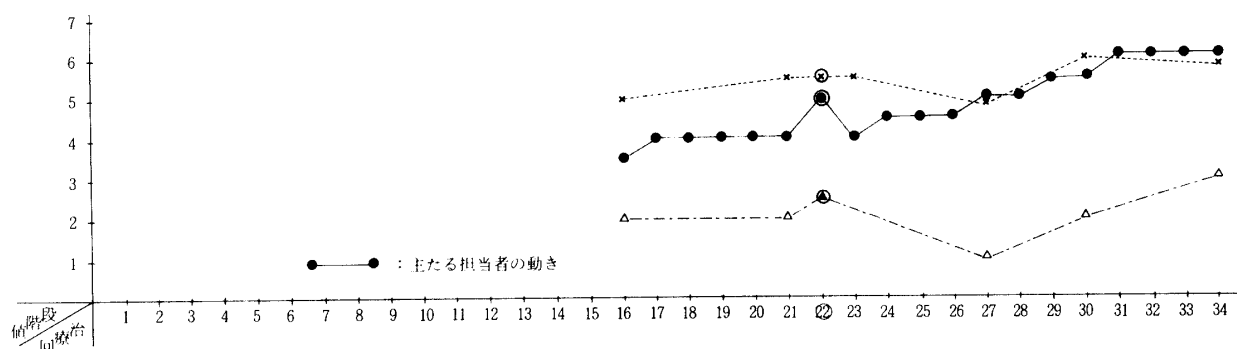
e) ミホの場合

図5-1に示されるように、外界に対するミホのかかわりのあり方は、療育にふたたび参加するようになってからの半年あまり、基本的には、変っていない。療育者に対しては、身体接触要求を中心としたかかわり方であり、言語理解はかなりあるが、そこに作られる関係は、きわめて表層的なものである。常同行動、空笑、興味の



〈図5-1〉スケールAの評定値の動き（ミホの場合）

## 発達障害幼児の療育合宿



〈図 5-2〉スケール B の評定値の動き（ミホに対する各療育者の場合）

狭さなどもいろいろとみられ、ミホとかかわれる遊びのレパートリーは、限定されてしまう。最初のうちは、頻尿がきわめて目につき、ほとんど 5 分おきにトイレに通うような状況であった。それは、20 回目位から少しおさまってきている。

そういう状況で、秋の療育合宿に参加したミホは、いつもよりかなり興奮し、彼女なりにせいーばいはしゃいで緊張のあまりか、ふたたび頻尿傾向が行きの車の中では顕著にみられた。日頃はみせてくれない行動も私どもの前でみせてくれるほどであった。そうしたミホの動きに喜んで、私どももあれもこれもと引っ張りまわすすぎたのかも知れない。家へ帰ってきたその夜に、ひきつけをおこし、発熱し、その後 1 週間は、ぐったりしていたとのことである。療育の場でも、その後 2 回程は、元気がないようで、療育者にベタベタと甘えてきていた。すこし元気を回復してくると、今まで興味のなかったような遊具にもわりあい関心を示したり、他児と並行遊びをしたりするようなことも少しつつみられてきている。

これらの点からして、ミホにとっても療育合宿はかなりはげしいゆさぶりかけとなっていたようにとらえられるだろう。そのことが、ミホにとって良かったのか悪かったのか、今の段階では、まだ十分いいいきることができないままである。

一方図 5-2 に示されるように、主たる担当療育者にとっては、この療育合宿が、ミホとの関係を深める転機になっているように思われる。ミホは、今ひとりの療育者に対し甘えていくことが多く、主担当の療育者は、むしろ一步退いて見ていたという状況でもあったが、この療育合宿の中で、ミホとの関係を確認することができたものと考えられる。それまで不自然だった動きが、ごく自然なものへと展開しはじめ、その後も回を重ねるにつれて、ミホに対し自由にかかわれるようになっていったとよてもよい。

## V 考 察

### 1. 療育合宿の意味と効果について

2 回の療育合宿の中で、私どもが意図したことは、どの子どもにも共通に、“ゆさぶりかけ”を与えるということであった。日常の療育とは異質な状況を用意することで、かなり強力な“ゆさぶりかけ”を行ない、その中でひとりひとりの子どもたちが発達の転機をつかめるような援助を行ない、次からの療育に結びつけていこうとしたものであった。

“ゆさぶりかけ”ということであれば、子どもたちは、みな、ひとりひとりその表現の仕方は違っていても、一樣に、日常の療育とはまったく異質な体験として受けとめていたものと認められた。外界に対する関心のもっとも低いマサトにおいても、きわめて未分化ながらも、何事かを感じ、興奮していたようである。マサトに対しては、それだけ強気に働きかけたという側面もあるが、そういった働きかけが可能となるような条件が作り出されていたといってもよいであろう。

そこで体験したことの意味あいは、まさにひとりひとりの子どもにおいて、異なったものであった。夏の合宿において、タツオにあっては、健常児の存在がきわめて大きな意味をもっていた。トシコは、思う存分走りまわることができた。マサトは、さかんに歩かされ、泣いたり笑ったりの体験がもてた。タケシは、生き生きと新しい場で動きまわり、また母親との関係を確認する時をもちえたことになったともいえる。秋の合宿でミホは、ただ興奮して、はしゃいでいた。

ただ全体にわたって言えることは、外界に対しての意識が十分に開けていない段階のマサト、トシコ、ミホなどにおいては、その体験したことは、きわめて未分化なものであったであろうということである。タケシやタツオにおいては、はじめて出会うまわりの状況に目を輝やか

せてかかわっていくという姿が認められた。しかし一方で、マサト、トシコ、ミホなどは、新しい状況で、はしゃいだり、興奮したりはしていたが、それを楽しい体験として認知し、みずからの中に位置づけるにはまだ至っていないといわざるを得ない。

療育者との関係においても、こういった療育合宿では、日常の療育での関係を、そのまま延張させただけのものではない。質的に異なったものであることが確認されるであろう。時にトシコにおいて顕著に示されるように、合宿中、トシコ自身、療育者を忘れて動きまわり、療育者はただトシコを追いかけてまわしているといった状況であったのだが、その後の展開には、むしろそれが意味ある状況であったと考えられる。このように、そこで得られた体験は、さらに次からの日常の療育の場に生かされていくような方向性で考えられるべきであろう。子どもたちにこの合宿の場で、どういう体験を与えようかと意図することは、療育者がそれをどのように生かしていくかということにも連なることであろう。この合宿療育自体、日々の療育の積み重ねの上に成り立つものであることは間違いないし、それをまた次からの療育にどのように積み重ねていくかという問題にもつながるものといえる。

ひとりひとりの経過を追っての検討の中では、特に、すべての子どもに、こうした療育合宿の効果、即ち発達を促進する上ではっきり目にみえて有効であったという点を確認することはできなかった。子どもたちはそれぞれみな、何らかの新しい体験をしたと感じているものと考えられたが、それが、その後の発達に、どのようにつながっていったかは、一概に論ずることはできない。日々の療育の中での、一つの積み重ねとして考えるべきことであろう。たしかに何人かの子どもにとっては、その後の展開のための何らかの契機となっていることは確認された。しかしもっともっと積極的に、ひとりびとりの子どもに、療育合宿での体験をよりいっそう生かしていくように意図されねばならないのは当然である。

一方、療育者にとっては、日頃なし得ない強力な“ゆさぶりかけ”が、じっくり時間をかけて試みられるということは、まさに重要なことであった。しかしなお、十分な時間はとりえず、期待したほど、じっくり落ち着いて関係を深め得たとはいえなかった状況ではあったが、それなりに、子どもたちの新しい側面に触れることができた点は、大きな収穫であったといえる。しかし子どもによっては、また同じ子どもであっても療育者によっては、何ら新しい側面を発見できずに終わってしまうこともあった。こうした状況では、余程のことがない限り、担当の子どもにかかわることが精一杯で、とてもそれ以外

の子どもまでは目がとどかないというのが、まさしく実情であったといわざるを得ない。

## 2. 療育合宿をすすめる上での問題点と、それを克服するための視点

こうした療育合宿においては、おのずから、子どもとの間で、日常の療育とは異なった関係のもち方が、要請されてくるであろう。じっくり落ち着いて関係を深め得るまでに到らなかったことは、これまでも指摘してきたとおりであるが、むしろそれまでになかった新しい側面からのかかわりが可能となってくることが示唆された。その点を認識することが、まず必要なことであるように考えられる。

基本的には、前にも述べたように、日々の療育の積み重ねの上で、療育合宿は位置づけられねばならない。子どもたちに“ゆさぶりかけ”をすすめる以上は、その刺激で不安定になった子どもを受け止めるだけの体制が必要とされてくるだろう。特に、外界に対する意識が未分化な子どもにおいては、療育者との間で、その不安を支えられるような安定した関係が形成されていくことが肝要である。そうしたものが、日常の療育の中で形成されていってこそ、“ゆさぶりかけ”が、子どもの発達促進の契機となり得るものであると考えられる。

またこうした状況において、母親に対し依存的になり、ふたたび分離不安を示す子どもも少なくなかった。原則として、療育者が責任を持って子どもを療育していく態勢であったものが、状況によってはやむを得ず、あいまいになった面もあるだろう。夏の合宿の時には、時間を区切って母親と完全に分離することを試みたりもしたが、年令の低い子どもたちを対象とする場合、新しい事態に直面させられ、ずっと母親から離しておくことは、むしろ不自然であるようにも思われた。すべての時間帯にわたり中途半端な形で、療育者がついていっているよりも、母親に任せる時と、療育者が責任をもって療育プログラムの一貫としてかかわる時とは、明確に分けるべきであると考えられたのである。

ともあれ、私どもの行なってきた2回の療育合宿においても、そのねらいとすべき点は、かなり異なっていたように思う。夏の合宿は、どちらかという混合療育的であり、秋の合宿は、その時の療育対象児だけに限られている。そうした集団の特質を生かすようなねらいは、一応意図されてはいたものの、今となってはなお、もう少し検討をすすめておくべきであったと考えられる面も少ない。たとえていえば、健常児との混合集団では、健常児たちを、障害児の療育にもっと積極的に参加させていくようなことをより強力にすすめるべきであったなどの点である。今後の問題として残しておきたい。

## おわりに

子どもと、まる一日、もっとじっくり腰をすえてつきあうような時間を、こうした療育合宿の中で作ることができたらと思っている。現実的な制約から、1泊2日以上の日取りを確保することは、今回、困難であった。というものの、1泊2日ではやはり、物足りなさが残る。たしかに、1泊2日の療育と、2泊3日のそれとでは、その持つ意味が大きく異なってくるだろう。私どもは、しかし、そうした状況をうみ出すためにはかなりの限界があることも十分承知している。承知しながらもなお期待したいものが残されるのである。

しかし、どちらにしてみても、こうした障害をになっただけの子どもたちは、こういった形ででも条件を設定しない限り、自然とふれあうという体験をもつことは、きわめて難しい状況におかれていることもたしかである。こうした体験をもったということだけでも、その意味は、大きい。村上、江口が主として担当し、その一部は別の機会に報告はしたものの、今回ここでのまとめにまでは至らなかったため、特にふれてはいないが、その母親にとっても、子どもとそういう体験をもち得たことの意味は大きい。この療育合宿をとおして、母親同士の関係も深まり、話が進展し、連帯感がまた新しく生まれてきているのである。その後の母親グループのまとめには、そういう面でも、目を見はるべき展開があったことだけを

つけ加えておきたい。

これらの試みは、たしかにまだまだ、模索的な域をこえていない。ただ、私どもが、こうして試みてきたささやかな体験が、障害をもつ幼児たちの発達に、少しでも援助となり得たならばと願って、この報告を、この段階では、終えることにする。

なおこれら日頃の療育活動をすすめる上で、独自の遊具などを工夫して作成して下さった奥村康雄技官のかけながらの御協力に深く感謝の意を表するものである。

## 文 献

- 村上英治・後藤秀爾・江口昇勇, 1976, 発達障害幼児の集団療育——その序説——名大教心紀要, **23**, 39-43。
- 村上英治・後藤秀爾・加納敏子・雲出道博・伊藤小夜子・小林佐智子, 1976, 発達障害幼児の集団療育(その1)——かかわりスケールにもとづく発達のとらえ——同上, 45-64。
- 村上英治・江口昇勇・浅田くに・西尾敦子・山田敬子・大角美穂子・永川邦久, 1976, 発達障害幼児の集団療育(その2)——2者関係の確立を基盤としての集団志向へ——同上, 65-83。

## THERAPEUTIC GROUP CAMPS WITH THE MENTALLY HANDICAPPED CHILDREN

Shuji GOTO, Eiji MURAKAMI, Yuri ENDO, Toshiko KANO and Norio EGUCHI

In these several years, we have continued the group therapeutic practice for the mentally handicapped children in the early stage. The group camp with the children is a link in a chain of this practice. This paper aims to discuss the meaning and the effect of the camps, which we have had twice this year. Through the discussions about 5 case reports, we can confirm the following findings.

- 1) There were different meanings and effects on each child in each camp, but in common these experiences were so exciting that all of the children were consequently shaken awake.
- 2) It was difficult for each therapist to make a closer relationship with the child in these situations.
- 3) Though the experience of the camp differ from the daily therapeutic practice, it must be based on this daily practice for us to obtain the meaningful effect.